

比庵佳境の会



山の煙
紅葉せる山の煙は何作る
歌をつくるによきはたけなり
九十比庵

「清水比庵の書」

「くれなる比庵」

講演会に清水 固氏をお招きして

現日会同人 平岡 常依



私たちは現日会は、創立者南不乘の理念である『一人一党』の精神を守り、『自由と奔放、個性豊かな格調ある書』『良い書』を目指して活動している書道団体です。

一 現日会公募展

現日会公募展は年二回。春季書展は二月下旬から三月初旬にかけて六本木の国立美術館にて、本展は八月初旬、上野の東京都美術館の一階ロビー階を全室使って行っています。スローガンの通り、漢字あり仮名あり詩文あり、一つとして同じものはなく、会員の書道芸術活動の発表の場となっています。中でも第一室に展示される、縦三メートル横一メートルを超える大作は圧巻です。

二 清水 固氏の講演

本展では、研修活動の一環として講習会を開催しており、今回の第五十八回展の講師として清水固氏をお招きしました。近年は、国立博物館館長、学芸員による書道史、書評や作品研究について、文部科学省調査官による書道文化の普及についてなどのお話を頂いております。

今回は、芸術作品を生み出す背景にあるもの、作家の人となりや信条などを探るお話をさせていただいたというわけです。講演内容は次の通りです。

- (一) 清水比庵の生涯
- (二) 清水比庵の生活信条
- (三) 比庵のつけられた名称
- (四) 比庵芸術の特徴 ①歌、書、画の

ターゲット点 ②歌 ③書 ④画

(五) 七十歳からの発展 ①正月雀 ②年齢

記載 ③くれなるぬをもて老いを描く ④

富士山と老松 ⑤推敲(省略と単純化)

⑥直書歌碑、襖書 ⑦線画と歌の組合せ

⑧辞詠歌と歌碑

(六) 比庵の人間性(まどかなる晩年)

作品のスライドを見ながら、ユーモアたっぷりの楽しいお話をしていただき、とても好評でした。講演会では時間が足りず、上野精養軒での懇親会の席でも続編を……。

三 比庵ファンになって

「歌・書・画」三位一体の比庵芸術。自由闊達で遊び心を持った作品には心惹かれ、現日会会員の中にもファンはたくさんおります。かくいう私もその一人ですが、きっかけは比庵の歌から入ったという変わり種です。事象を目の前にして、入り込むのではなく、常に俯瞰している。大変な経験をうたつてもなぜか満ち足りたものを感じる。そんな歌を作品に書きたくなり、著作権の問い合わせをしたのが始まりでした。

没後五十年を経っていないため、著作権協会に登録の有無を調べたところ、登録がありません。そこで清水固氏に使用許可を願いました。が、なんと鷹揚な、開口一番「どんな使ってください。私は比庵の作品を世に広めたいのですから」というものでした。それから毎年、比庵さんの歌を書かせていただいております、今回の講演会にもつながりました。

四 比庵作品の展示

比庵作品の実物を拝見させていただきながら講演の打ち合わせをするにつれ、これは実際の作品を会員の



現日会で講演される清水 固氏



現日会展示場入口（上）と会場風景（下）

した。重厚さと軽やかさ、静と動が一つの画面に存在し、文字と文字の粗密が絶妙なバランスを保っている。落款が計算されたように絶妙に配置されている。感動を文字で表現すると薄っぺらになりますが、少なくとも会場の方々に比庵書の世界観が伝わりました。比庵は歌人に一字書や大字を勧め、自らも大字を書くことを好んでいたようです。ご存命中に現日会の書展を見ていただいたらと思うと心が躍

清水比庵の故里 備中高梁 歌碑めぐり

現日会第六代会長 故城所 湖舟

この寄稿文は旅が好きで比庵ファンであった故城所 湖舟（きとこうしゅう）氏が平成十三年に旅の競書雑誌「凌雲」に寄稿したものを関係者のご許可を頂いて本誌に転載したものです。城所氏の略歴は次の通り。
一九三〇～二〇一七、横浜国立大学名誉教授、現日会六代会長（この寄稿文記述時は常任理事）、毎日書道界参与ほか書写教育に尽力

「毎日歌境」（日光展図録）、「水清き清水比庵隨筆集」（昭和六十三年）などで予備知識を深めました。旅は何時もそうですが、事前の調査と資料集めが勝負です。

二 高梁の歴史

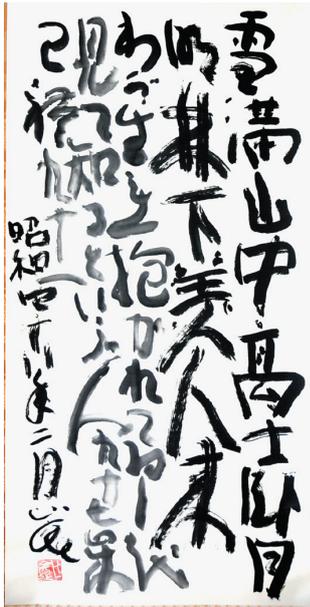
たまたま書の仲間との旅があり、道後で別れ岡山から伯備線で五〇分の高梁に寄っています。備中高梁は小京都として今や脚光を浴びています。古い歴史、文化と街並みなど江戸時代の面影が残っています。さっそく「石火矢町ふるさと村」の武家屋敷と白壁の蔵など、昔のままの歴史の道を歩く。足利尊氏建立の安国寺（頼久寺）に入ると禅寺式の山水蓬莱庭園の大サツキの刈込が満開で、小堀遠州の石組みの庭、鶴亀の庭は愛宕山を借景とした見事な造園でした。再び駅に戻り日本の道百選に選ばれた紺屋川美観地区を歩く。小川ですが両側は桜並木で古い商家が建ち並び、城下町の面影を残しています。まちを流れる高梁川は堤防が洒落ていて白壁で、一見城壁のように見える。



頼久寺庭園

皆さんに見ていただきたい。そうでないとい三位一体の比庵芸術が伝わりにくいと担当のだけれども思うようになり、書展会場での小品展示、講演会場での条幅作品展示が実現したのです。一番見ていただきたかったのは、比庵晩年の漢詩と自詠歌の組合せ作品です。セキユリテイの面から残念ながら講演会場展示は叶いませんでしたが、比庵さんの人となりがかかった後に作品を見ていただいた時、会場からは「おー」という、感嘆の声が上がりま

雪満山中高士臥 月明林下美人来
わが生れ抱かれてのしを見て知ると
いふ人九十七歳われ九十一 昭和四十八年二月 比庵



比庵作品 漢詩と自詠歌

「ありがたや、ありがたや。」 以上

ります。また現日会の第六代会長、故城所湖舟（横浜国立大学名誉教授）は、比庵の自由に遊ぶ書境、飾らない深い清廉な心の表現に感銘を受け、高梁、笠岡、日光、湯西川、奈良、深大寺、青梅と、比庵の碑をめぐり、「書の旅シリーズ」と題し紀行文を残しています。これもまた師の存命中に固氏との交流があればもっと豊かな世界が広がったのではないかと、思うと残念でなりません。

歌人は書を！ 書家は歌を！

これに画を加えた三位一体の芸術を完成させた比庵さんに習い、自詠の作品を書けるようになるまでは、比庵さんの歌をちよくちよく拝借させていただきますことにします。

今回快く作品展にご協力いただいた清水固氏に感謝申し上げます。

- 事前調査と準備
- 高梁を訪れる前に手持ちの「墨七十二号」（一九八八年五月月号）、「近代書道クラブ」（一九五九年九月号）、「八十五翁記念清水比庵集」（一九六七年書道研精会刊）、「清水比庵作品集」（高梁市歴史美術館版）、「清水比庵歌碑拓本集」（濱崎道子著一九九四年）、毎日佳境「清水比庵・窓日彫拓本集」（濱崎道子著一九九七年）、「書を語る」（二玄社）、「近代文化人の書―書美求心」（足田寛吉著）、「書の風景」（石川九揚著、筑摩書房）、「清水比庵

高梁は小さな城下町だが、幕末のさいは藩侯の板倉勝静が幕府の筆頭老中として活躍しました。彼が抜擢した漢学者山田方谷が産業を興し学問を奨励しており、そういった遺風が比庵の子供時代（明治十〜二十年代）にも残っており、学問を大切に漢学・漢詩を作り大書するという土地柄でした。このことは比庵を知る上で大切なことです。父もさかんに詩を作り何枚も書いて楽しんでたという。蛙の子は蛙で、比庵もうまく書けないと嘆息しながら、何枚も何枚も書いていたといっています。父はこの児は未（ひつじ）年だから「恐ろしく紙を食う」と言っていたと後年比庵は述べています。

三 城南荘歌碑

高梁川の対岸に比庵が愛した旅館「油屋」の別館城南荘があり、その歌碑を始めとしてタクシーで比庵歌碑めぐりをするにしました。碑は庭内の土手下のところにあり、独特な文字の大小、行の流れ、文字と文字がからみあうように美しく、こどもも踊っていました。(八十四歳、昭和四十一年建立)

山も河もふるさともなくれぬるに
色を染めたる霧の朝なり

於城南荘 比庵



城南荘歌碑

四 ふいご峠歌碑

次は松山城へむかう。歌碑は臥牛山の城址に行く途中のふいご峠にあり、そこまでは車で行ける。狭い山道を二十分ほど走り、歌碑の前で降りる。一目見て素晴らしい碑、比庵自ら言う日本一の碑だ。日本一高い山城、日本一水の清い高梁川、日本一が三つ重なった碑で新年歌会始め御題の「川」を詠んだ碑。高梁川の川原に埋っていた石に、じかに書き

水清き川のながれて山高し
日は山を出て川をわたるも
八十八歳 清水比庵



鞆(ふいご)峠歌碑

て彫ったもので、台石のデザインも石色もよい。

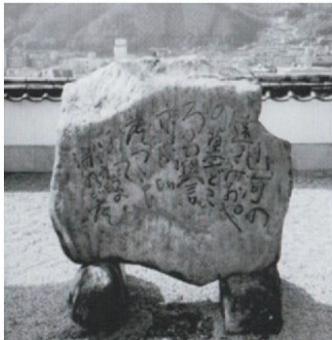
五 松連寺と宝妙寺の歌碑

次の車で清水家先祖の墓地と比庵・三溪兄弟の墓がある松連寺にむかう。昭和四十六年(八十九歳)に比庵は高梁市名誉市民になり、その記念にこの寺に歌碑が建立されました。遠くから見ると城のような寺で、「寅さんシリーズ」の舞台にもなったと運転手が語る。五十過ぎの歴史に詳しい人で、こ

ちらの行く先のお寺をいうとすぐわかる人であった。松連寺の長い折れ曲った石段を上ると、左の塀側に碑はあった。この碑もふいご峠の碑と比べて遜色のない名碑でした。茶色がかった自然石が遠い山を背景に、どっしりと重量感のある碑でした。

ここから次の有漢町(現在は高梁市に合併)の宝妙寺まで十六キロメートル。ここは妻鶴代と母すえの生地である実家の菩提寺でもある。七十七歳の歌碑で四里の道程曼珠沙華(彼岸花)の花咲く道を歩いて来た意の心温まる歌でした。近くの上有漢町には「いろは」の歌碑があるが、時間切れで見られず心残りでした。

山河の遠きみおの墓といひ
名誉市民比庵つゝしみて 八十九歳 清水比庵



松連寺歌碑

なき妻のさとしあれば高梁ゆ有漢四里みち
曼珠沙華のはな 比庵



宝妙寺歌碑

六 雲泉寺の歌碑

高梁市の町はずれの山里宇治町の雲泉寺に歌碑があると知り行って見た。山峡の谷間をいくつも越え、曲がりの多い細道の連続でした。途中部落があり白壁造りの民家が点在し、まさに仙境の地だ。タクシーで五十分ほどでやつと山門下の広場についた。青龍山雲泉寺の道標にさそわれて、石段を十数段登ると本堂だった。禅寺らしい格式の高さを思わせる堂宇が山奥の静寂の中に立ち並ぶ。真つ先に鐘楼に行く。昭和三十三年七十六歳のときに書いた鐘銘を見る。円形の中に比庵独特の五行ちらし書きの歌が鑄されていた。「十万世界平和と書かれていた。鐘の音を聞き、平和な喜びの声に聞こえた比庵の人のよよく出ている歌でした。運転手との話声が聞こえたのか、庫裏から住職の母堂が出てこられ、本堂脇の書齋に案内され、茶菓の接待を受けた。寺号「青龍山」の直筆の額と梵鐘の拓本が額に収まっていた。寺の正面の山あいには秋になると美しい朝霧が立ちますという。この寺に比庵さんが初めて来られた時、時鳥が鳴いていて即興の歌を詠み、その歌碑が建つ。

七 高梁文化交流センター

離れがたい雲泉寺を後にして駅の近くに

建つ「高梁文化交流センター」へ行く。平成九年に建てられ、名誉市民比庵の業績を称えて「比庵佳境の間」が特設され、常時作品が展示されているとわかり、事前に電話しておいた。立派な建物で受付で名乗ると学芸員が出てこれ、高梁市内の比庵歌碑のある場所と、歌碑のコピーをくださった。田舎は親切です。その上、開催特別展の比庵作品集と随筆集「水清き」の二冊、いずれも絶版の手にはいらない貴重本を分けていただいた。感謝感激し、二階の比庵の間に行く。正面の四枚の襖に画、床の間に良寛像と歌、その前に宮



記念交流館

中歌会始めの儀に召人として詠んだ歌を大高壇紙に書きミニ歌碑が置かれている。和風作りの比庵の間は、比庵芸術凝縮の花園でした。八 終りに

高梁の町は比庵さんがよくお書きになった「山高く水清し」の、自然の美しさが今なお残る、美しい街でした。またそこに住む人々たちの、人情のあたたかさが、しみじみと肌感に感じる町でした。武家屋敷の簡素で侘びのたつまい、商家の並ぶ昔ながらの風情にしばし二、三百年前まで時計の針をもどしたような錯覚にとらわれました。一泊二日、駆け足の比庵歌碑めぐりは、近來にない充実と収穫の多い旅でした。

以上

清水比庵と絵手紙

清水比庵、固氏と二希の会

二希の会 湯田 純子

私達「二希の会」は日本絵手紙協会公認講師研究会二期生の有志十名で十年前に発足し、毎月一度持ち回り講師制で学んでおり、今年五月に大崎ウエストギャラリーで平成十二年に続いて二回目の展を致しました。



その折長く交流を重ねてきた比庵の孫である清水 固（かたし）氏のご好意で比庵コーナーを設け、比庵富士・比庵雀と一年十二月（むつき、如月）を絵手紙にして出品しました。加えて私が長年の亘り頂いた固氏お手製の十数冊の比庵資料と、手持ちの比庵関連印刷物等を大机に並べたところ、皆様が熱心に見て下さり関心が深いことを嬉しく思いました。そしてこれからも多くの方々に楽しんで頂くために、大崎ウエストギャラリーが毎年比庵展を開催することを引き受けてくださいました。（五月末から六月初旬に開催予定）

私が初めて比庵を知ったのは「月間絵手紙」の比庵特集を見た時で、誰にでも分り易い墨の世界でした。その後新日本橋の小津ギャラリーで実物作品を目に出来ました。のびやかで力強く自由奔放なのにバランスがとれていて、今迄見たことがない衝撃の世界でしたが、疲れることのない不思議な感覚でした。その後平成二十一年調布市の深大寺での比

庵展開催を知り、友人達にもとパンフレットのお問い合わせをしたのが固氏と初めてのご縁でした。そして展二日目に固氏にご挨拶しましたが、この日は比庵の一人娘で固氏の母である明子（はるこ）様のトークがありました。百歳であられるのに朗々と筋目正しく長時間父親である比庵からの絵手紙にまつわる楽しいお話を語られました。ショッキングビ



上 明子100歳のトーク
左 二希の会（絵手紙）の皆さんが訪問
平成22年
明子101歳

ンクのスーツにスカーフ襟元に大きな赤いバラが大層お似合いで、私はご家族の温かい思いに満ちた装いのかしらと感じました。展示作品は固氏のご案内で一点一点丁寧に拝見させて頂きました。



ここからのご縁で以後源吉兆庵美術館（鎌倉市）、遠山記念館（埼玉県川島町）、墨の美術館（横浜市青葉区）、固氏地元の展示場などでの比庵展や固氏のトークを楽しみました。鎌倉では参観後固氏のご友人の案内で鎌倉の歴史散歩をして鎌倉幕府の遺跡を回ったことも思い出に残っています。このほか印象的だったのは平成二十二年三月に百一歳になられた明子様が入居中のホームを皆でお尋ねしたことです。応接室で歓談中に固氏の発案で明子様がお歌を（そうじつぼり）の立派な硯を用いて歌を書かれ、最後

に「年齢をどうしましょう」と一瞬お考えになり百歳と一歳と書かれたのです。その当意即妙さはさすがでした。明子様は翌年百二歳でご長寿を全うなさいました。歌が好きで清水比庵と會津八一に傾倒しておられる私に、固氏は明子様の遺品である八一本三冊をお届け下さいました。今も大切に時折開いております。

固氏からは時折お電話やお便りを頂き、時々友人と展やトークに出席しています。心に残っておりますのは日本絵手紙協会でのスペシャル講座の「祖父清水比庵を語る」です。作家となるずっと以前から絵手紙を樂しみながらご自分を鍛えた比庵は大先輩ですから、有意義なお話でした。

又平成二十四年岡山県倉敷市で開催された絵手紙全国大会の後比庵の生誕地高梁市の総合文化会館内「清水比庵記念室」を訪れました。沢山の比庵作品が並ぶ一番奥の大きなガラスの中は有名な正月雀の屏風や、窓日彫卓茶道具などが設えてある立派な展示でした。更になんとこの時、明子様の遺髪埋葬のために立ち寄られた固氏と妹様にお会いして声をかけて下さいました。私は昨年再び友人と二人で岡山市吉備路文学館での「清水比庵と川合玉堂展」を見に行きましたが、この時も固様のお計らいで学芸員から親切に説明して頂きました。

固氏は以前「自分の余生はすべて比庵顕彰に捧げます」と言われ、八十六歳の今も精神的に展示企画や比庵の生きた姿を語り伝え、更に一族や友人知人等沢山の皆さんが支援されています。比庵の若くして父君を失い一家の柱となり粉骨砕身して家族を支え、和して「毎日佳境」に生きた姿が固様の優しさとおおらかに重なります。「毎日佳境」だからこそ老いても力強くなり、びやかな作品を描き、今も私達を前向きで幸せにしてくれています。比庵の輪が更に広がることを祈っております。以上

清水比庵と二希の会

二希の会 高橋 和子

清水比庵との出会いは九年前の平成二十一年（二〇〇九年）です。その年の十一月下旬紅葉が見事な調布市深大寺客殿で清水比庵展があり、比庵のお嬢様清水 明子（はるこ）様が百歳の記念講演をされました。その時、明子様のご息固様にお会いしたのが初めてでした。温かいお二人の手柄は比庵様、明子様、固様と受け継がれ、心がほのぼのとしたこと思い出します。

その後明子様が入居されていた練馬区老人ホームを訪問して百一歳の明子様とお話をし、色紙に揮毫されるのを見たりしました。明子様は百二歳で他界されましたが、そのご葬儀にも参列させていただきました。

固様には引き続き鎌倉の吉兆庵美術館や埼玉県川島町の遠山記念館比庵展でもお世話になりました。鎌倉吉兆庵美術館では一緒に話していただき、作品のエピソードを紹介していただき、遠山記念館では学芸員の方を紹介していただき、その方とゆっくりと作品についてお話し出来た事など楽しい思い出です。



比庵富士
比庵コーナーの絵手紙

去る五月に大崎ウエストギャラリーで開催した二希の会第二回作品展には特別に比庵コーナーを設置して固様にもお出で頂きました。人のご縁の不思議さと固様の優しさに、私たちは「学ぶ心」、「生きる力」を頂きました。人として本当に素晴らしい方で感謝の気持ち一杯です。以上

清水比庵と三溪

第二回ウエストギャラリー

清水比庵展に参加して

笠岡市美術館 豊池勇

今年の六月に大崎ウエストギャラリーに於いて第二回目の「清水比庵展」が開催されました。出展作品は約七十点、それに「窓日影

富士山 三溪



(矢部犀洲)を数点中央にテーブルを設けて展示されました。

山の手線大崎駅から徒歩一分と地の利も好く、多くの方に清水比庵芸術に触れて頂く機会を得ました。大崎ウエストギャラリーは絵手紙関係の展示会を開催している事もあり、絵手紙ファンも多く来場されました。

清水比庵先生は絵手紙の父とか元祖とか称される存在です。

今はコミュニケーション・ツールとしてラインやEメールがひろく社会に行き渡り、日常の事と成っていますが、それと同じ感覚で、比庵は大正・昭和の世に毎日の出来事を知人に自作の歌と絵を添えて送り、また人からの送られて来る便りを何よりの楽しみとして過ごしました。後年に「比庵三芸」と称される「歌・書・画」の世界は比庵に始まり、日本芸術史を通観して、自ら詠んだ歌を独自に確立した書体を持って記し、それに自ら絵を添える芸術は稀な存在です。

大崎ウエストギャラリーで開催した比庵展では二つの主題が設けられました。

揚花火開くすなはち消えてあり
暗き夜空をいや美しく 比庵



一つ目は作品展には初出品の作品を多く披露し、広く比庵芸術に触れて頂く事。二つ目は比庵の第三溪にもスポットを当てて三溪の作品も多く展示する事。

初公開の富士を描いた作品や珍しいスイカを描いた作品などが展示されました。

二つ目の主題である清水三溪は本名を浩(こう)、号を三溪と称し、比庵とは十二歳離れた末弟です。比庵の援助を受けては慶應大学に進み、卒業後は証券取引所に務め活躍しました。後に戦後の経済復興を陰で支える働きをした経済人です。得意な語学力を持って証券取引所を再開させた業績は大きなものです。日本経済の再生の翼を担った人物です。また兄比庵の作品を愛し、自らも筆を執って作品を多く残しています。

三溪のそのような働きは証券界に豊富な人脈を築き、その一つとして山種証券創立者・山崎種二氏との交流を得ます。山崎種二氏は現在は渋谷区広尾に在る山種美術館の所蔵品に見られるように日本画に造詣が深く、日本画家・川合玉堂と知己を得ていました。この



作品展会場(銀座松屋)にて
比庵(八十二歳)と三溪(七十歳)

芦ノ湖
水の首に枕してとや山の湯の
一夜ねがめに鳴くほととぎす



画 三溪 歌 比庵

山崎氏を通じて三溪は玉堂との縁を得ます。更に三溪は比庵を玉堂に紹介しました。歌に興味があり、偶庵(ぐあん)と号していた玉堂と比庵は意気投合して、互いに先生と呼び合う畏敬の交流を持つことになりました。

折 昭和十七年

秋比庵は最愛の妻に先立たれ深い悲しみに包まれました。三溪は比庵の心底を慮り元氣付けるために、かねてから比庵と計画していた兄弟作品展(野水会・やすいかい)を近々に実行することにして、その年の十二月に銀座紀伊国屋書店画廊で第一回野水会展を開催しました。これに玉堂が賛助作品を出したこともあり、作品展は盛会で、以後戦中戦後も毎年玉堂の賛助作品を加えて開催され、玉堂が他界する昭和三十二年まで続きました。川合玉堂は自ら描いた日本画に自作の歌を添えた作品を多く創っていますが、歌を創るに際して、玉堂は比庵に歌の添削を乞うています。

雪ふるといひてほそ目に戸をあけぬ
わが見るべくもふりしきるなり

三溪画 比庵歌



比庵八十八

大黒様(三溪七十八)
頭巾に「東海福 南山壽」と
比庵が書き込んでいる



この縁から、大崎ウエストギャラリーで開催された清水比庵展の特別講演会として、山種美術館学芸課長の榎淵豊子氏に比庵及び三溪の芸術について論説を展開して頂きました。榎淵氏は比庵・三溪に共通している事として、日常の何気ない事柄を高い精神性で捉え作品に活かしている事を述べ、比庵のスイカの作品に特に注目しスイカの上にジツとしている虫の位置に感心していました。ここしかないという位置に描かれていると絶賛していました。また、比庵の富士を語るのに予め準備していたスライドを用いて葛飾北斎の富士 横

山大観の富士、富岡鉄斎の富士と比べて清水比庵の富士は全く独自の富士であると論じています。

会場では清水家秘蔵の比庵の歌を書いた帯を展覧し、篆刻家小田玉映氏に実際に着けて頂き披露して花を添えました。

会場に三溪の作



比庵歌の帯
ほのぼのとむらさきにほふ朝ほらけ
うぐひすの聲山よりきこゆ 比庵八十四曼



講演をされた榊淵豊子氏と比庵の帯を着けられた
篆刻家の小田玉瑛氏

品として、吊し柿を三つ描き「拙きは った
なきままに楽しくて 絵筆八十年いまだかき
たらず 三溪八十六」と歌を添えている作品
がありました。これを一瞥になりながら、
一人の婦人が『この絵は「まだかきたらず」
だから「柿」を描いていらつしやるのでしょ
うかね。』それを受けてお友達が「そうね。
三つじゃ足りないのかしら…」と楽しくお

拙きはったなきまゝにたのしくて
絵筆八十年いまだかきたらず
三溪八十六



話しする会話を漏れ聞きました。こちららほ
のぼのとした気分になる会話でした。
来年も同じ大崎ウエストギャラリーで五
月三十日から第三回清水比庵展が開催される
予定です。また、初公開の作品と新しい出会
いを楽しみにしています。 以上

清水比庵の歌 (五)

「窓日」編集長

秋葉 貴子

八重椿つぎつぎ花のさきつぎて
逢はぬ日数をうつくしくする
椿の花や薔薇の花は、比庵が特に好んだ
花である。そしてその「くれない」は特に好
まれた色。ここでは「くれないの花」とは言
っていないが、その色が浮かぶのである。
咲き継いでいる花が、「逢はぬ日数をうつ
くしくする」は、何と華やきのある詠嘆であ
ろうか。比庵の好んだ「くれない」その何れ
にも日本画的な発想に基づく境地のようなも
のが潜んでいるように想う。この歌ではこれ
といて、強調するものではないが、「逢は
ぬ日数を美しくする」この言葉が相聞の心を
ふかめ、またロマンティック度を大きくして
いる。

また次のような歌もある。

わが歌をかきたる瓶に挿しておく
寒の椿の君のくれなゐ

この上句の味わいは、またとない、そし
てその瓶に挿してあるのは、「寒の椿」であり、
「君のくれなゐ」であるとした。そこ
には、君への想いが
が充滿していて君
への憧憬の念が余
すなく表現されて
いる。



八重椿うつまかく咲きつぎて
逢はぬ日数をうつくしくする

八十七比庵

追記：八重椿の
花の画の画賛には
二句を「うづまく
如く」としている
が、その後推敲し
て「つぎつぎ花の」
に変更している。

清水比庵の書 漢詩の一句

南山と秋色

南山と秋色 氣勢兩相高

比庵八十九



長安秋望 杜牧

樓倚霜樹外 鏡天無一毫

南山と秋色 氣勢兩相高

高樓は霧枯れの木々に沿って立つ。

空は鏡のように澄み渡り雲一つない、南山と秋の

景色には共に崇高な氣勢があふれている。

今後の比庵展のお知らせなど

◎今後の比庵展

今年の比庵展は終了しました。明年は例年
一月開催している横浜市青葉区「墨の美
術館」での比庵展を、季節の良い五月開催す
ることを検討中です。また例年六月に開催し
ている東京都品川区大崎ウエストギャラリー
開催の比庵展は五月三十日(木)と六月四日
(火)開催で計画中です。これらについての
詳細は明年四月発行の第11号会報でお知らせ
します。

◎高梁比庵会「清水比庵大賞(短歌の部)」 についてのお知らせとお詫び

会報9号でお知らせした次回(第十四回)の
比庵大賞は明年夏募集予定ですが、詳細はま
だ決まっておられません。従って本件も第11号
会報で詳細をお知らせします。

なお第9号の会報で、第九回清水比庵大
賞作品「ほどほどの大雨ならば歓迎です福島
をきれいに洗ってください」の初句を「ほの
ぼのと」と誤記しましたことを訂正し、かつ
作者と読者の皆様に深くお詫びいたします。

会費納入のお願い

30年度の会費を納めていない会員の方は下記
に納入されますようお願い致します。
一口、1,000円(複数口歓迎)
三井住友銀行鶴見支店普通 7061558
名義 クボタノブユキ

比庵佳境の会

会長 清水 固(清水比庵の孫)
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
URL: <http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>
幹事: 比留間 哲生
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-25-7
TEL 090-4608-0488